

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	株式会社 東京演劇集団風	
施 設 名	レパトリーシアターKAZE	
助成対象活動名	普及啓発事業	
内定額（総額）	4,789	(千円)
		(千円)
		(千円)
	4,789	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【普及啓発事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	エクリチュールバガボンドー解き放たれることばの掲示	2018年5月5日～12日	子どもたちや街行く人が芸術に触れるアウトリーチ活動 出演 柳瀬太一、柴崎美納ほか	目標値	5,000
		群馬県みなかみ町・レパートリーシアターKAZE		実績値	2,393
2	第22回凱旋公演『Touch～孤独から愛へ』	2018年12月23日・24日	『Touch～孤独から愛へ』 出演：柳瀬太一、佐野準ほか 演出：浅野佳成	目標値	270
		レパートリーシアターKAZE		実績値	186
3	教育連携事業 〈明星学園〉	2018年7月31日、8月23日・24日	児童が「演劇」に出会うワークショップ 指導：浅野佳成、渋谷愛ほか	目標値	30
		レパートリーシアターKAZE・アトリエ月夜野		実績値	27
4	教育連携事業 〈鹿児島城西高等学校〉	2018年10月17日	芸術研修のためのワークショップ・実演者との交流 指導：西垣耕造・辻由美子ほか	目標値	30
		レパートリーシアターKAZE		実績値	32
5	劇場体験週間 『ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち』	2019年2月5日～10日	バリアフリー公演『ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち』 出演：白根有子・渋谷愛ほか	目標値	640
		レパートリーシアターKAZE		実績値	482
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	5,970
				実績値	3,120

## 【妥当性】

### 自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

#### ○ 当初計画からの変更点：事業番号1の実施場所及び参加者数

当初：都内及び群馬県内の13カ所で5000人の参加者を計画

変更後：特に劇場及び近隣の商店街、みなかみ町の小学校、駅前など計10カ所において、2393人の参加者を対象とした

理由：「何年もかけ観客を定着させ、観客との間に絶えず交流を生む」というミッションに基づき、計画を見直し、不特定多数へのアプローチではなく、継続した交流が生まれ得る協力団体、劇場・アトリエ周辺地域での活動に重点をおいた。その結果、教育関係者や新聞各社に「演劇交流 子ども育む」と注目を集め、地域に対し質の高い先鋭的な試みを発信することが可能となった

#### ○ 当初計画からの変更点：事業番号2 公演実施回数

当初：実施回数3回／変更後：実施回数2回

理由：協力団体からの要望により、公演前後のバックステージや実演者との交流を充実させるため、公演回数を変更。出演者やスタッフが細やかに対応できるよう工夫した。結果、学生からの積極的な質疑応答、継続した交流が生まれた

#### ○ 当初計画からの変更点：事業番号5 参加者数

当初：640人／変更後：482名

理由：当初は113席の客席設置を計画していたが、福祉団体との協議を重ね、障害のある方々がリラックスして演劇体験できるよう、全体7回のうち、4ステージは団体毎の鑑賞・体験、3ステージは車椅子席等の設置を含む計80席確保へと計画を変更。結果、一人一人に対応し、安全性を保ち交流することが可能となった

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

劇場の実演者・ノウハウを生かし、人々・地域社会に貢献する活動に精力的に取り組んだ結果、以下のような“劇場”を、地域(中野区、都内、関東)に示し、地域のあらゆる人々への貢献へと繋がった

#### ○ 国際共同を活用した、教育分野での新しい演劇活動の実施、その拠点劇場

#### ○ 障害のある人も共に楽しめる劇場・創造の発信

—視聴覚障害、知的障害の方に向けたバリアフリー演劇

#### ○ 小学生から大学生に渡る幅広い年代に向け、

演劇に多面的に触れ、実演者との交流の中で文化芸術の豊かさを知る“学びの劇場”



事業番号5 アフタートークの様子



事業番号3 ワークショップの様子

## 【有効性】

### 自己評価

目標を達成したか。

#### 目標に対して

普及事業5事業を通じ、全体の78%が「初めて演劇に触れた」「初めてレパートリーシアターKAZEを訪れた」となっている。また、目標に掲げた〈障害者や子供、その保護者〉が事業を体験した割合は5事業を通じ16%、特に〈劇場体験週間〉〈教育連携事業〉では、ほぼ100%となっており、目標は達成されたと考える。

日程やプログラムを協力団体と細かく打ち合わせしたことで、バックステージツアーや実演者との交流も手厚く行うことができた。また参加者の反響が地域内での口コミへと波及。特に、「初めて体験した」人々の継続した来場、次年度計画への発展へ繋がり、嬉しい成果である。

また、普及事業を実施したことで、劇場・運営者のノウハウも蓄積され、助成金の対象となっていない劇場独自の普及活動（修学旅行生の研修受け入れ、他劇団・他劇場からの視察対応、福祉団体との継続した交流）も実施できている

#### 指標に対して

全ての指標達成に及ばなかったが、「多様な要望に応えるレパートリーシステム」を実施したことで、アンケートや事業実施後のレポート・感想文などが例年より多く(65%)寄せられ、個々の観客からの高い反響を得ることができた。

アウトリーチ体験者数も達成とはならなかったが、事業を通じ、初めて劇場を知り、以来定期的に劇場に訪れる観客も多い。「新しい観客を創出する」という内容は、実現されている

113席満席という指標に対しても、上演作品により客席設置数が異なり達成できなかったが、車椅子席の設置や視覚障害のある方に対応した敷席の設置なども行った。また、設置・計画した客席数に対しては、96%の集客を実現した



事業番号5 バックステージツアーの様子



事業番号4 俳優と生徒の質疑応答の様子



事業番号1 みなかみ町内での実施の様子

## 【効率性】

### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。  
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

---

#### 事業期間について

事業を行う協力団体や専属団体間の調整、協議を繰り返し行ったことで、当初の計画から日程の変更はあったが、普及啓発事業対象者が演劇に親しむためのそれぞれの実施プログラムの充実を図りつつ、最も効率的な日程を計画し実施することができた

#### 事業費について

専属団体東京演劇集団風のレパートリー作品を用い、劇場とアトリエの双方を活用し、普及啓発事業を行ったことで、特に舞台費部分を抑え、質的にも費用面においても効果的な実施を行うことができたと考える。今後も、レパートリーシステムを活用し、地域の多様な要望に応えられるプログラム、バリアフリーの取り組みを行っていく

## 【創造性】

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

地域に対し、芸術性の高い演劇作品を発信し、人々・地域に貢献する劇場としての資源

#### ○ 2人の演出家・芸術監督を有し、独創的な創造活動、地域への発信を行う

浅野佳成：長年の演劇活動（特に、青少年に向けた上演活動実績、海外アーティストとの交流）への評価が高い。近年ではバリアフリー演劇の演出も務め、演劇の社会性を追求している

江原早哉香：新進演出家として、現代演劇上演（特に現代作家マテイ・ヴィスニユック作品）への評価を得ている。2017年に劇場芸術監督に就任後は、福祉作業所と連携した劇場体験週間の充実やレパトリーシアターKAZEの地域発信など新たな企画提案を行い、地域に根ざし、地域に開かれた劇場づくりへ力を注ぐ

#### ○ 専属団体：東京演劇集団風

演劇活動に従事する俳優・スタッフによるプロフェッショナルな実演者集団。製作者に頼らず、実演者としての経験を活かし、世界レベルの現代演劇の企画創造、地域に根ざした劇場運営、地域に対する広報、全国への発信、国際交流を一手に担う。上演作品は、ベルトルト・ブレヒトなどの社会派、チェーホフなど芸術派、ベケット・カミュなどのフランス不条理劇系、新鮮なアメリカ素材・カナダ演劇など多岐に渡る。

〈2018年レパトリーシアターKAZEでの上演活動に対し、第20回テアトロ演劇賞を受賞〉

#### ○ 提携団体：スフルール・コマンド・ポエティック

レパトリーシアターKAZEを日本での拠点とし、全世界で活動する芸術家集団。2016年からはフランス文化省から、「公共空間での芸術活動部門」における国立芸術集団に指名され、地域での活動に力を注ぐ

#### ○ 提携団体：Palabra株式会社

映像や舞台作品など、芸術作品へのバリアフリー（日本語・多言語）字幕・音声ガイドの製作、提供を行うプロフェッショナル。レパトリーシアターKAZEの創造のバリアフリー面を担当する

#### ○ 演劇のあらゆる要望に応える劇場空間および付帯設備

「小劇場ながら、開放的かつ創造意欲を掻き立てられる劇場空間」として、国内外の演出家、舞台美術家から高い評価を受ける。

またアトリエ月夜野を付帯設備として持ち、レパトリーシステムを可能とする大道具等のストックヤードだけでなく、実演者の創造探求、地域住民との交流の場としても活用されている

#### ○ 地域に根ざす実演者が、観客との交流の中で自らプロデュースする、他に類を見ないレパトリーシステム

2003年に開始した国際演劇祭を機に、海外アーティストとの交流を協働にまで高め、教育と演劇の新たな接点を生む「エクリチュール バガボンド」を日本・フランスのアーティストが集い、新たに実施

#### ○ 障害のある人も、ない人も共に楽しめる演劇創造を……バリアフリー演劇の開始

バリアフリー日本語字幕・舞台手話通訳・ライブによる音声ガイドを付し、レパトリー作品をバリアフリー演劇として上演。本番前後の舞台説明、バックステージツアーを実施したほか、チラシ作成、受付対応なども含め、将来的な共生社会づくりへの貢献に向けた一歩を踏み出した

## 【創造性】

### 自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

#### ○ 「また違う作品も見て見たい」「次も楽しみにしています」

チケットの価格や開演時間の見直し、バックステージツアーや俳優・スタッフとの交流・アフタートークを実施したことで、事業実施後のアンケート・感想文、ヒアリング、協力者からのレポートからは、次回公演への意欲、次年度への継続への高い意欲が見られる。また、観劇を通じ、家族や生徒、利用者の「新たな一面を発見できた」、「積極的な変化が見られた」という声が多く寄せられた

#### ○ 文化芸術の力で地域振興に貢献する

劇場が所在する中野区、アトリエを持つみなかみ町双方において、演劇公演やアウトリーチ活動を実施。新聞やウェブサイト上で多く取り上げられ、文化による地域振興への貢献の一步を踏み出した

#### ○ ウェブサイトやチラシでの地域での発信、観客との継続した交流

ウェブサイトの閲覧数は約3万人に達し、特に実演者と交流できる(掲示板)には、鑑賞した青少年や教育関係者、保護者からの書き込みが多い。演劇を志す学生と実演者が意見をやりとりする光景も見られる。近年は、フランスアーティストによるチラシデザイン、ロゴ製作にも取り組んでおり、「チラシを見て」という観劇申込者も徐々に増えている



事業番号5 実施前の新聞掲載記事  
「バリアフリー演劇に新風 垣根越え楽しめる舞台目指す」

事業番号1 実施後の地域広報誌「みなかみ」  
「新治小学校で、日本初の試み」



## 【持続性】

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

#### 将来に渡って持続し、発展するための運営計画

制作部を置かず、実演者が演劇にまつわる全ての仕事（創造・運営・企画・経営）を行う。そのため、実演者がやりがいを持って芸術活動に専念できる環境づくり（稽古場の確保や財政面の保証）や個人の意欲に沿った研修機会の創出（ワークショップの実施や海外・地方での研修など）にも取り組んでいる。さらに演劇志望者に対し、実習生・研究生制度を導入。これまで、劇場での観劇・体験を機に高校卒業後に入団した者もあり、劇場での普及啓発事業の重要性を示唆している

また、実際に観客と交流し触れ合い、最も観客を知り創造活動を行っている実演者が自発的に企画・立案し、レパトリーシアターKAZEを運営できるための、新たな体制作りに取り組んでいる。

#### 実演者の在籍年数の高さ

正規雇用率は残念ながら低いですが、実演者（特に俳優）の在籍年数は、最も若い者でも8年となっており、実演者の約3/1は32年間となる。20～70代の幅広い年代構成で、年間200ステージを超える実践を繰り返しており、高い実績とノウハウが蓄積されている。将来的には、正規雇用率の向上も重要な長期的目標である

#### 地域からの信頼感の醸成

特に、普及啓発事業のクオリティの高さ、体験者の反響を通じ、劇場が所在する中野区、みなかみ町の行政機関からの信頼感が高まっている

#### 地域の教育現場や、福祉施設との交流

地域の高校や中学などの教育機関との連携やワークショップ・演劇部との交流、学校と協働した演劇公演の実施、福祉団体との連携による観劇・連携も継続している

#### 他の文化施設とのネットワーク形成

レパトリーシアターKAZEを訪れる他の文化施設担当者も徐々に増えており、レパトリーシアターKAZEで行われている事業・公演形態を、そのまま他の文化施設へ導入する事例も増えている（特にバリアフリー演劇やバックステージツアーの導入）。また、海外のフェスティバルや劇場からの問い合わせにも対応している（平成30年度問い合わせ：中国／モルドバ共和国／ドイツ）